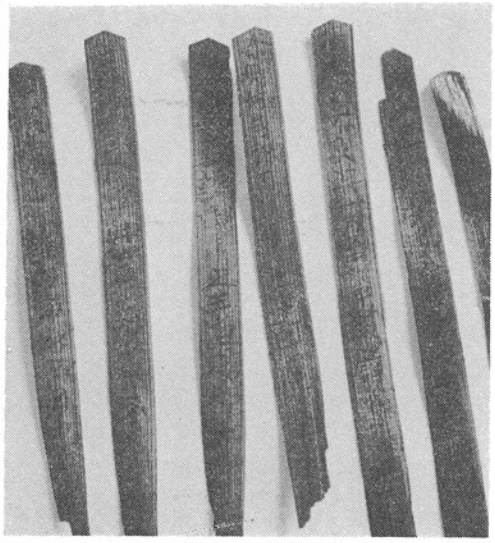
(4)　「南無阿弥陀仏　　(176)×8×2　059

(1)は『妙法蓮華経』巻第六の「随喜功徳品」第十八中の経文であり、末尾の□は「辺」である。本柿経は「妙法蓮華経」であることが知られる。なお、前記の経文の解読には、網干善教氏（関西大学教授）の御教示をいただいた。

9　関係文献

前沢輝政「足利・法界寺址の調査」（『日本歴史』四六一号　一九八六年）

（前沢輝政）



宮城・今泉（いまいずみ）城跡

1　所在地　宮城県仙台市今泉字久保田

2　調査期間　一九八一年（昭56）四月～八月

3　発掘機関　仙台市教育委員会

4　調査担当者　佐藤　洋・斎野裕彦

5　遺跡の種類　集落跡・城館跡

6　遺跡の年代　縄文時代後期～古墳時代・平安時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

今泉城跡は、仙台市南東部名取川と広瀬川の合流点の東側約一・五kmにある標高約四mの自然堤防上に位置する。以前の調査で複合遺跡であることが知られており、本調査においても確認された。主要な遺構は、一〇世紀、一二～一三世紀中頃（Ⅰ期）の集落跡、一三世紀後半～一四世紀初頭（Ⅱ期）・一四世紀前半～一五世紀後半（Ⅲ期）・一六世紀～一七世紀前半（Ⅳ期）・

（仙台）

一七世紀中頃〜一九世紀中頃（Ⅴ期）の城館・居宅跡である。このうち、周囲に堀を巡らす城館跡はⅡ〜Ⅳ期のものである。また、主要な出土遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器、渥美・常滑・瀬戸・在地産・中国産（青磁・白磁・黒釉天目・染付）・唐津・美濃（黄瀬戸・志野・志野織部など）・備前（？）・伊万里・相馬などの陶磁器、木製品、鉄製品、動植物遺存体などがある。

木簡の出土した遺構は、Ⅱ〜Ⅲ期にかけての城館を区画する堀跡であり、Ⅲ期に属する堆積土層（3層）中より常滑・在地の陶器などと共伴して、木簡が出土している。木簡は五点出土したが、このうち(2)〜(4)の呪符木簡は一括出土であり、(1)はそれらに近接して出土している。また、木簡出土地の東側には橋脚が検出され、館への入口があったことがわかる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　(110)×22×3　019

・「□〔是カ〕鼻の□〔是カ〕」

・「□鼻の□〔十カ〕」

(2)　196×27×(2)　051

「□□[illegible]急〻如律令」

(3)　206×27×3　051

・「□□□□〔天カ〕☆　」

・「□□急〻如律令」

(4)　(194)×25×3　051

・「□□☆　」

・「[illegible]天□□急〻如律令」

五点のうち他の一点は墨痕を留めているものの細片で、文字・形状ともに不明である。また、(2)は他と同様に両面に文字が書かれていたと推測されるが、片面を失っている。

さて、(2)〜(4)は頭部を圭頭にし、下端を尖らせたもので、胎蔵界の真言（アビラウンケン）などの呪句や五行押点など天刑星の信仰に関わるものと予想される呪句がみえることから、これらは呪符木簡である。西日本に盛行した招福・除災に関わる信仰が中世の東北にも民間信仰として根付いていたことを示す資料と言えよう。

これらの木簡は、奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏の肉眼観察では、ヒノキ材の可能性が強いとの御教示をいただいたが、宮城県では明治以後に植栽され本来自然分布を示さない点で、木簡等のヒノキ製の木製品の存在は興味深い。

解読に際しては、東北歴史資料館の赤外線テレビを借用し、国立歴史民俗博物館の平川南氏に御教示いただいた。

9　関係文献

仙台市教育委員会『今泉城跡（仙台市文化財調査報告第五八集）』（一九八三年）

（佐藤　洋）